



読書感想文コンクール
わたしの漱石、
わたしの一行

中学生の部

最優秀賞	17
優秀賞	18
朝日新聞社賞	20
紀伊國屋書店賞	21
新潮社賞	23
早稲田大学賞	24
佳作	26

高校生の部

最優秀賞	41
優秀賞	42
朝日新聞社賞	44
紀伊國屋書店賞	45
新潮社賞	47
早稲田大学賞	48
佳作	50



幸福の条件

筑波大学附属中学校 3年

鈴木 理乃

作品名『こころ』

選んだ一行

私たちは最も幸福に生まれた人間の一对であるべきです。

「私たちは最も幸福に生まれた人間の一对であるべきはずですが、これは先生が「私」に自分と妻について語った一文だ。私はこの一文に先生と妻の関係がよく表わされていると思った。先生はなぜ「幸福だ」という断定的な言い方ではなく「幸福であるべきはずだ」と言ったのだろうか。先生は幸福ではないと感じていたのだろうか。私は家族の幸福の証は「愛」なのだろうと思っていた。そして先生と妻はお互い愛し合っているのだから幸福なのだろうと推測していたのだ。しかし私は読み進めるうちに幸福な家族になるには「お互いの信頼」が必要不可欠であると気づいた。例えば、仲のよさそうだった夫婦がどちらかの不倫が原因で破局するという話はよく聞

くが、これも夫婦間での信頼が失われたからだと思う。

見せかけの愛ではなく、お互いの信頼こそが幸せを生むのだ。そして先生と妻にはその信頼がなかったのではないだろうか。その原因は先生が持つ深い過去だ。先生は妻を自分のものにするため、自分の親友を裏切り、その行為が親友を自殺に追い込んだ。その深く暗い過去が先生に罪悪感という暗い影を落としていたのだ。先生は、妻にその過去を悟られるのではないかと怯えながら、妻はその違和感に気づき何故夫は教えてくれないのか不安にかられながら、知らないうちにお互いを探り合っていたのだ。つまりその過去の秘密が二人の間の信頼を妨げる壁になっていったのだ。しかし先生はその過去を死んでも妻に明かさなかった。先生は遺書で、こう述べている。

「妻が己の過去に対して持つ記憶をなるべく純白のまま保存しておくのが私の唯一の望みなのです」と。先生は自分が最も尊いと思う妻のここを自分の醜い過去で壊してしまうことを恐れて言わなかったのだ。また最も愛すべき妻には、自分が感じたような罪悪感を抱え生きる苦しみを味わってほしくなかったのだと思う。

そう考えると先生の辛さがよくわかる。愛する妻が先生に愛以上のものを求めている、自分もそれを心の底から望んでいる。しかし妻に求められれば求められるほど自らの暗い過去と切り離せなくなり、妻の気持ちにこたえることが出来ない。どちらにせよ妻を傷つけてしまう。これほどまでに虚しく悲しい矛盾があるのだと私は初めて知った。

先生のところはまるで、温かい血の流れを何層にも重ねられた冷たい氷が覆っているようだ。どんなにその血が温かくても氷の層が冷やしてしまう。その分厚く冷たい氷が先生の生の動きを押さえつけるのだ。

私はまだ「愛」の奥にある「信頼」を知らない。(たぶん愛さえもまだわかっていないのだと思う。) 愛は信頼のための単なるプロセスに過ぎないのかもしれない。将来大人になったらその答えが分かる 때가来ると思う。そうしたらまたこの本を読み返してみたい。その時どのように感じるかとても楽しみだ。

審査講評

文章がよく練られていて、言葉に色艶がある。妻と先生の関係に注目しているのが『こころ』の感想文として珍しい。家族の幸福の証は「愛」ではなく「信頼」であるというロジックは、なかなか思いつけるものではなく、大人びた印象を受けた。

《中学生の部》

優 秀 賞

「亡びるね」

二松學舎大学附属柏中学校 1年

山本 新

作品名 『三四郎』

選んだ一行

「亡びるね」

熊本から列車で上京する三四郎。その列車の中で、三四郎は奇妙な男と出会う。その男はこういう。「…いくら日露戦争に勝って、一等国になっても駄目ですね。」三四郎はこう反論する。「然しこれからは日本も段々発展するでしょう」。だが男はこういった。「亡びるね」と一言。夏目漱石の小説、『三四郎』の一節だ。この言葉は、日本が日露戦争勝利で浮かれていた1908年に生まれた台詞だが、将来日本は亡びるといふ大胆不敵かつ冷静な予想をしていることに僕は驚いた。そして、その予想は、当たった。

日清戦争、日露戦争と勝ち進んだ日本に住んだ日本国民は、日露戦争が接戦だった事も知らされず、「自国は大日本帝国という大帝

国だ」と思ってしまった。そのせいで、日本は第一次世界大戦、日中戦争、第二次世界大戦（太平洋戦争）と戦争をしていった。そして、日本に残ったのは、無数の焼け野原であった。

日露戦争の直後、日本人が「大帝国」の幻覚を見ていたのに、夏目漱石は他国を侵略する日本の愚かさを見つめ、日本は亡びる、と書いた。そこがすごいところだと思う。

漱石の考察は日本の帝国主義の足元にも向けられる。『三四郎』が発表されてから6年後、講演「私の個人主義」の中で次のように語る。「（イギリス人は）自分の自由を愛するとともに他の自由を尊敬するように、小供の時分から社会的教育をちゃんと受けているのです」。「僕は左を向く、君は右を向いても差支えなくらいの自由は、自分でも把持し、他人にも附与しなくてはなるまいかと考えられます。それがとりも直さず私のいう個人主義なのです」。そして、もし個人主義が分かりにくければ、「私の宅までおいで下さい」、と聴衆に呼びかけて講演は終わる。

漱石は、「大帝国」の老家本元、イギリスに留学した。ヴィクトリア時代のイギリスは、自由主義が定着し、選挙権拡大運動を経て、「議会の世紀」と呼ばれた。個人主義をベースに政治制度の革新を続けたイギリス。一方で、国家中心のナショナリズムを政治の中心に据えた日本。イギリスを自分の目で見えていた漱石は、日本が亡びるのは当然、と考えたのだろう。

「亡びるね」という台詞が世に出てから百年余り。今の日本を生

きる私たちは、みんなで漱石宅に出かける必要があるのではないか。亡びないために。

審査講評

作文としての完成度がとても高い。『三四郎』だけでなく『私の個人主義』にも触れられていて、「漱石宅に出かける必要がある」の結びが効いている。これからも幅広く考える読書が続けてほしい。

漱石の考えと現代の思想

早稲田大学高等学院中学部 1年

渡辺 聡基

作品名『坑夫』

選んだ一行

本当の事を言うとは性格なんて纏ったものはありません。

私が選んだ一行は、『坑夫』の中の、

「本当の事を言うとは性格なんて纏ったものはありません。」

という文だ。これは、主人公が東京から逃げている最中にたまたま会った人に呼び止められ、彼がいろいろと考えている場面である。

なぜ私がこの一行を選んだかという点、この言葉は、現代の思想や教育に影響するかもしれないと考えたからだ。現代日本では、教師が一方的に生徒に教育を行ったり道徳心を備え付ける教育、いわば固定的な教育が疑問視されてきている。そこで、生徒を授業の中心と考え、生徒主体で行う教育、いわば活動的教育が支持されてきている。例としては、最近注目が高まったアクティブ・ラーニング

である。まとめると、現代日本では、個人を尊重する動きが高まっているということだ。このことが、

「性格なんて纏ったものはありません。」

という考えと同じではないか、と私は気付いたのである。

夏目漱石は、作家であるだけでなく、中学校に勤務した経験もあるという。当時、中学校はできたてであり、教師の漱石自身もとても大変だっただろう。何せ、子供達が全員、おとなしく教師の話や説明を聞くはずがない。そのとき、当時多くの教師が怒ったはずである。しかしながら、漱石は違っていたと私は思う。漱石は、自分が後に文豪となる身として、新しい視点、考え方を探した訳である。そして、探究を繰り返して、たどりついた答えが、

「性格なんて纏ったものはありません。」

という視点である。人はそれぞれ個性があり、ひとりひとりが違う。それを上手くまとめ上げることが、どんな威厳のある人でも、神でさえも難しい。だから、人ひとりひとりを、

「この人は、こういう人だから。」

と性格により固定しないで、個性を大事にするということを、漱石はどうとう考えついたのである。

私はこの一行を考えて、これは、

『漱石の、現代人に向けてのメッセージ』

であると感じている。漱石が苦勞しながら確立したこの思想は、彼が没してから百十年以上たった今でも生き続けている。そして、こ

れからの日本の未来への一つの架け橋になろうとしている。漱石は、
今も日本人の心に生き続け、心を常に前へと動かし続けている。

審査講評

漱石の小説観や人間観を表している『坑夫』を選んだ洪さが
良い。作中に表現された問題を自分の問題として引き受け、現
代人に向けてのメッセージとして解釈しようとしている。

《中学生の部》

紀伊國屋書店賞

強さ

大妻中学校 1年

依田 花音

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

いくら言葉巧みに弁解が立っても正義は許さんぞ。

私が坊っちゃんを読んで気に入った一行は、「いくら言葉巧みに
弁解が立っても正義は許さんぞ。」というセリフだ。このセリフは
赤シャツと野だいこを坊っちゃんと山嵐がこらしめた時に発した山
嵐のセリフだ。私はこのセリフに「強さ」を感じた。山嵐にも坊っ
ちゃんにも共通すること、それが「強さ」だと思う。たしかに力の
ある二人だが、力ではない「強さ」を持っていると思った。

二人に共通する「強さ」は二つある。一つ目は自分の考えをしっ
かり持ち、周りに流されない芯の強さだ。特に坊っちゃんは小説を
通しても正しいことは正しい、間違っていることは間違っている、
と自分の意思をぶらさずに持っている様子がわかる。私は小学生の

頃、周りに流されてしまった経験がある。六年生の時、ある先生が授業のたびにみんなからかわれていた。その先生の口癖や口調をからかい、そのたびに授業が止まる。私もはじめのうちは注意が来ていたのだが、だんだんそれがエスカレートしていくうちに、心の中では確かにいけないことだと分かっている。今ではその授業の雰囲気からなかなか注意出来なくなりました。今ではその授業の雰囲気を変えられないまま卒業してしまいました。今でも後悔している。こんな時、坊っちゃんならいくら周りがよしとしても、真っ先に声をあげると思った。

二つ目は、後先考えず立ち向かう勇氣があるところだ。けんかをしなければ赤シャツ達からどんな仕返しをされるかわからない。しかし、二人はそれを分かっているながらも堂々と立ち向かった。私には足りていない部分だ。先に述べた小学生の頃の話でも、ここで声をあげたら何か言われるのではないか、と躊躇してしまったりとところがある。今でも、「後でこうなるんじゃないか」という思いが邪魔して自分の思ったことを言い出せない時がある。たしかに、後先考えない行動が良いとは限らない。しかし、坊っちゃん達のように、自分が正しいと思うことなら後のことなんて気にせず、それを一貫すればいいと思った。もしそのしっぺ返しが来たとしても、自分は正しいことをしたんだと勇氣を持って堂々としていれば、きっと認められるはずであり、たとえそれが間違っていたことであってさんざんにやられたとしても悔いは残らないと思う。

私はこの本を通して、強さを学んだ。そして、自分をもう一度振り返ることが出来た。これから、きつと納得できない事がらを決めつけられてしまったり、正しいと思ったことをみんなから否定されてしまうこともたくさんあると思う。もちろん、無理に意地を張って人の意見を聞き入れないことは良くない。しかし、相手の考えを受け止めた上でもまだ納得がいかないのならば、私も坊っちゃん達のように、勇氣を持って声をあげたい。

審査講評

時代背景や取り囲まれている思想を踏まえた感想文が多い中で、純粋に作品の中身に絞って、自分の経験・考えと擦り合わせて正直に文章にしているのが新鮮だった。学んだものは「強さ」と「勇氣」だと、潔く述べられている。

「自由に考えること」

新宿区立牛込第二中学校 3年

太田 希瑛

作品名『三四郎』

選んだ一行

「日本より頭の中のほうが広いでしょう」

私が「三四郎」を読んで印象に残ったのは「日本より頭の中のほうが広いでしょう」という一文です。この一文は本を読む前から知っていたのですが、前後の物語も含めて読むと、より印象的でした。私は、この一文が表すものは、想像し考えることができる人間の自由さだと思います。人間の「考える」という行為は無限の可能性を秘めている、そう感じました。日本も地球も、限られた世界です。必ず端と端があります。それと比べて人の頭は、様々なことを考えることで、どんどん広げて、発展させることができます。また、この世界に生きる人々は、それぞれ考え方も、物事の見方も違います。そういった大きな意味でも、考えることの可能性は無限大といえます。

す。

自由に、いろんなことを考えて生きることが出来る。今まで何気なくやってきたことですが、よく「考えて」みると、とてもすごいことなのだと思います。自由に考えて生きることが出来るということは、言い方を変えれば、一人一人、全ての人が無限の可能性を秘めているということだからです。人間は、自分がどう考えるかによって、人生を明るくも暗くもできると思います。考え、想像することは、希望を生み出すことにも繋がるのです。

私自身、今までは物事からすぐ逃げたり、否定的に考えたりして、自分の世界を狭めてしまふところがありました。特に志望校決めでは、あまり関心も持たずに、自分の狭い価値観で判断をして、高校受験に希望が持てませんでした。しかし、高校の説明会や塾の合宿でいろんな方の話を聞いて、考え方が変わりました。「チャレンジするのには遅すぎることはないから、まずはチャレンジする心を持つこと。」そんな一言が印象に残りました。振り返ってみると、私は自分の殻に閉じこもって、新しい何かに挑戦するということが無かったように思います。そこで、自分でもいろんなことを知り、視野を広げようと、受験について前向きに捉え、高校のことを調べたり、将来について考えてみました。その結果、行きたい高校や、今後やりたいことが見つかり、固定観念に縛られず、いろんな考え方をすることが大切なんだということに気がきました。

今回「三四郎」を読み、自由に考えることについて考え、視野を

広げること、いろんな考え方をすることの大切さを学びました。自由を考えることは、希望を持つことや、チャレンジすることの始まりです。私は来年中学校を卒業し、高校生になります。また新しい世界で自分の可能性を広げ、幅広い視点から物事を見られるような人間になりたいです。

審査講評

『二四郎』の中で最も大事な一行を選んでいる。最後に「自由に考えることは、希望を持つことや、チャレンジすることの始まり」と定義していることに、気づきと考察の深まりを感じた。

《中学生の部》

早稲田大学賞

自分らしく生きる坊っちゃん

大妻中学校 1年

中井 美咲

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

人間は竹のように真っ直ぐでなくっちゃんたのもしくない

坊っちゃんはバカです。小学校の時、同級生が馬鹿にしたからといって二階から飛び降りて腰を抜かしたり、ナイフを見せていたら友達に切れそうもないと言われ、何でも切ってみせると言い、指を切ってみると注文されると本当に切ってしまったりしたからです。一見、周りの人の言葉に振り回されているようにも思える行動ですが、そこまでは人はなかなか出来ないと思う事までやってしまう坊っちゃんは、個性的で自分を持っているなあと思っております。

私も友達に馬鹿にされていると感じる事がありますが、大抵の場合には我慢するか、せいぜい口で少し言い返すくらいです。坊っちゃんのように大胆な反撃をする勇氣もなければ、発想も浮かびません。

自分にはない行動を次々とやってのける坊っちゃんの魅力に取りつかれてどんどん読むことが出来ました。

坊っちゃんに登場する清の存在は、私の身近にはいない大人の人の人です。私には何でも話せる友達はいませんが、大人の人で両親以外に清のような人がいるか、改めて考えました。

始めは、坊っちゃんと清は私が今まで読んだ事のある昔の小説に出てくるような主従関係なのだと思って読み進めていました。しかし清は、坊っちゃんの好きな食べ物や生活習慣、やせ我慢して出た言葉など何でも理解してくれます。そして清は坊っちゃんの事を沢山褒めてくれるのです。清の古い考え方や価値観で、坊っちゃんの間違いを注意してくれたりもします。自分の甥っ子にも坊っちゃんのことをとても自慢したりするのです。

坊っちゃんが、少し変わり者で友達から冷やかされたりした時も、自信のない態度になってしまわないのは、清の存在があったからなのかとも思いました。私だけでなく、私の周りの友人でも今、両親以外の大人の人から愛情を注いでもらったり、自分の事に関心を向けてもらったりしている子は少ないのではないかと思います。下宿先でも坊っちゃんは清に手紙を書いています。清からも精一杯の力で書いた手紙が送られて来ます。私は手紙どころか両親以外の大人の人にメールで近況を相談できる人はいないので、そういう点からも清の存在が坊っちゃんにとって大きいのだらうなと思いました。

私は、坊っちゃんの言葉で今後の自分の生き方にも参考にしたい

と思える言葉はいくつかありました。その中でも、一番印象に残り素朴なのに力強いと思えたのは「人間は竹のように真っ直ぐでなく、ちゃたのもしくはない」という一言です。竹は大木ではありません。私の力でも曲がります。しかし、ポキッと折れてしまう事もないし、細くしなやかで真っ直ぐな竹をたのもしい性格に例えているところが、坊っちゃんらしいと思いました。私も坊っちゃんのような個人的な考え方を取り入れていきたいです。

審査講評

一行のチョイスが良いし、よく読み込んでいる。清という存在の大切さ、自分を文句なしに愛し信じてくれる人が、成長していく上で必要なのだと着目しているところが良い。

正義の無鉄砲

新宿区立牛込第二中学校 1年

中村 祐允

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

親譲りの無鉄砲で子供の頃から損ばかりしている。

「親譲りの無鉄砲で子供の頃から損ばかりしている。」

僕は、この言葉が、一番記憶に残った。五年生の時に暗唱する機会があったせいかもしれないが、この言葉が、この物語の全てのような気がしたからだ。この主人公は、子供の頃から後先考えずにやる事が、いつもハチャメチャだった。家族からは将来を心配され、お手伝いの清だけが、唯一、この主人公のことを「心がきれいだ、まっすぐで良いご気性」と褒めていた。親譲りとあるから、両親も同じような性格だったのだと思う。そして、子供の頃から損ばかりしているということは、大人になった今でも、損をしているということだ。自分でもこの性格は治らないと思っっているし、でも治す気

もないと思っっているように感じる。

僕は、話の最初でここまで主人公の性格について、詳しく説明するのを不思議に思いました。この主人公の性格について、この先の話で、僕がどう感じるのか考えてみてくださいと言われているような気がした。

僕はこの主人公が好きだ。やる事がカッコいい。寄宿生のイナゴ事件の時も「いたずらだけで罰はごめんこうむるなんて下劣な根性がどこの国はやると思っているんだ。」と説教した。その通りだなと思った。最後に赤シャツと野だいこに、けんかを仕かけた時も、成功するように応援したし、なんだかとても心がスッキリした。だって、赤シャツと野だいこは卑怯だったからだ。そして、ちゃんとやったことへの責任をとって学校を辞めた。

もし、僕がこの学校にいたら性格からして、みんなに合わせてしまい、文句を言うこともできない主人公とは正反対の存在の先生になっていたと思う。でも、この主人公のような先生に出会えたら、生徒達もだんだん変わっていったように、僕も性格が変われたんじゃないかと思う。

ところで、僕は、どうしてこの本の題名を「坊っちゃん」としたのか最後まで分からなかった。どうみても、この主人公は、僕の思う「坊っちゃん」のイメージではないからだ。この呼び方をしていたのは清だけだ。清は主人公の家にいたお手伝いなだから、こう呼んでいたのも不思議ではないが、清が一番、この無鉄砲な中に、

この主人公の本当の正義の姿を見抜いてそう呼んでいたとしたら、この「坊っちゃん」は、ただのわがままな「お坊っちゃん」ではなくて、本当の意味での立派な男らしい男性という気持ちを含めた「坊っちゃん」だったのでないかと思う。そして、夏目漱石は清の呼んでいたこの呼び名を主人公の「あだ名」として、題名に選んだのではないかと思った。

《中学生の部》

佳作

吾輩は猫であるを読んで

新宿区立牛込第二中学校 2年

篠原 豪太

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

ありがたい。ありがたい。

僕の「吾輩は猫である」のお気に入りの一行は、「ありがたい。ありがたい。」という最後の文です。

まず、この本は猫が主人公です。中学校で教師をしている珍野苦

沙弥に拾われます。猫は自分を吾輩と語り、猫の世界に生きる自分の主観で、人間界を眺めていきます。そしていろんな感想を持ちながら、人間の優秀な点と愚かな点を暴露していきます。「吾輩は猫である」の主人公である猫は、とても賢いです。人間の言葉を理解し、猫同士でコミュニケーションをし、俳句を詠んだり、また失敗から学んだりします。特に僕が凄いと感じたのは次のセリフです。「人間というものは到底吾輩猫属の言語を解し得るくらいに天の恵に浴しておらん動物である。」です。これは、人間は、自分たち猫の言葉が分からない、なんてかわいそうな動物だろう、という意味です。僕は昔猫を飼っていたことがあるのですが、これを読んで「あの子もこんな風に思っていたのかな」と考えてしまいました。「今日の魚はあんまりおいしくないぞ、まさか安物か。」なんて思っていたのかもしれませんが。

本作では数々の事件が発生します。これらの事件を猫である吾輩は、猫の主観・視点・捉え方をもって、いろいろな空想を持ちながら眺めていきます。眺めたあとで自分なりの思惑を、その事件の痕跡を辿る形で補強します。吾輩は猫でありながら、それでも日本に住む人間に愛着を湧かせ、なるべく自分も、人間が繰り広げる文化や生活に慣れ親しもうとする努力をします。ラストシーンでは吾輩は水瓶の中に誤って落ち、そこで亡くなってしまいました。吾輩はビールを飲むという人間の習慣を会得しようとしています。そのときに亡くなります。人間でも、ビールによって泥酔して事故を起こし、そ

のまま亡くなってしまふことはあるものです。吾輩もビールによって亡くなってしまいました。つまり、吾輩は人間の文化に浸透してしまつたのです。そして、最後の「ありがたい。ありがたい。」という台詞を吐かせた心情は「人間の世界に自分が溶け込むことができ、その上で人間と同じように死ぬことができありがたい」といった「人間に近寄ることができたことを賛美する思惑」にあるとも見て取れます。これを踏まえて言うならば、この作品は「人間の愚かさや欲深さを暴露しながらも、それらを受容し賛美している人間讃歌の物語」となるでしょう。

《中学生の部》

佳作

客観的

新宿区立牛込第二中学校 2年

森田 心

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

「人間というものは到底吾輩猫属の言語を解し得るくらいに天の恵に浴しておらん動物である。」

「吾輩は猫である」の主人公の猫は賢い。毎日毎日、飽きるほど人間を観察でき、話を聞くことができる。猫が人間をみて文句を言うなど聞いたことはないが。猫の視点で書かれたこの本は、私にとって新しい影響源となった。言話を発せない猫は人間をどう見ているのか。また、どう感じているのか興味を湧いてきた。

「人間というものは到底吾輩猫属の言語を解し得るくらいに天の恵に浴しておらん動物である」これは、本の中にあるセリフだ。私は、このセリフにピンツときた。この世の中では、大小とわず争いはあるだろう、しかしそれは人間どうしが同じ位置から話をしているからだと思う。だからその争いの中に猫がいればいい、つまり、客観的にみる人をつくれればいいと思う。それで解決するとは限らない、さらに課題が増えるかもしれないし、逆に課題を見つけることが出来るかもしれない。違う視点から見ることによって影響をうけたりし、新しい課題が見つかるかもしれない。課題が次々出てくれば争いは、良い方向へ進むだろう。

この客観的にみるというのは、どの場面でも必要だと思う。どんなに楽しくて鼻歌を歌って歩いていても、はたから見れば変なやつだし、どんな複雑な理由があつて泣いていても、周りは可哀想とまでしか思わない。しかし、これが大事だと思う。自分の価値観で物事を進めても争いが起きるだけだろう。これは、政治の中でも同じだ。1人が発言しても他の誰れかが発言し、討論になり客観的にみ

る人が出て良い方向へ進むの繰り返しだ。しかし、客観的にみる人がいるから、一担良い方向へ進むのだと思った。

この本を読んで、一行だけこんなに深く考えるとは夢にも思わなかった。自分の価値観で押し通しても争いが起きる。しかし、客観的をヒントに良い方向へ進む。これを教えてくれたこの本は私にとって影響源となった。これから、争いが起きたとしても、客観的ということをしてヒントにして解決していきたい。自分の価値観を押し通すよりも、周りの人はどう思うだろうと考えてみて他の価値観を聞いてみるのもいい解決方法だと思う。

《中学生の部》

佳作

私の「ころ」

新宿区立落合第二中学校 1年

横山 あい

作品名『ころ』

選んだ一行

「自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。ひとに愛想をつかした私は、自分にも愛想をつかして動けなくなりました。」

私は「ころ」を読んだ。最初にこの本を読んだ時にはいつもの読書の時にようにすんなりとは入ってこなかった。そして十二歳の私には理解しがたい文章が並ぶ中特に難しかったのが次の一文だった。

「自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。ひとに愛想を尽かした私は自分にも愛想を尽かして動けなくなりました。」

難しかったからこそ興味を持ち、理解しようと何度も読み返した。

かつて自分を裏切った叔父にあきれて、怒りを覚えた私もいつしか、目標としていた人ではないその対極にいる叔父のようになってしまい、親友を裏切り、最後には自殺にまで追いこんでしまった。そんな自分自身にあきれて罪の意識をもち、つぐなおうとするもののいつもその意識は暗い影となっていてくる。結局、その暗い影は「私」から離れることはなかった。

このように私は解釈した。人はみんな自分は正しいという信念がどこかにある。しかし、「目の前に嫌いな人が現われたらその人が嫌いなのではなくて、その人の中に見える自分自身が嫌いなのです」というのをどこかで聞いたことがある。この文を解釈したことにより強くそう感じるようになった。

私はこの物語りから初めて大人の世界を見ることができたと思う。「こころ」の登場人物のやりとりから学ぶこと。それは一つの明かりに夢中になっていると周りのものは暗がり隠れて知らないうちに傷つけてしまうことがあるということ。お話でいえば親友から恋心を聞いていたにも関わらず、先をこされるまいと先手をうつことに夢中になり、暗がり隠れた「親友」を追いこんでいた、ということに当たるのではないか。これは今の私たちにおいてのいじめやこれからの社会の中で起こりうることだと思う。ここまで大げさではないかもしれないが自分勝手な行動で相手を傷つけてしまうことは少なからずともあるだろう。

この物語りは自分で解釈しながら一つ一ついいねいに読むと私た

ちに何か大事なことを教えてくれているような気がする。

明かりに夢中になったとしても行動を起こす前に少しでも周りを見れば暗がりを減らすことはできるのだと。

明かりをふやすことも可能なのだと。

《中学生の部》

佳作

「告白」

新宿区立新宿中学校 1年

岡本 仁牙

作品名『こころ』

選んだ一行

「話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。」

この本を読み終えた直後の感想は、「切なく、闇が深い」ともややもやした気持ちでした。裏切られ、裏切り、後悔、懺悔、それらは私の人生でまだ味わった事のない程の深い闇です。

先生と主人公の間には常に壁があったように思います。それは

後に先生の心の闇によるものと分かるのですが、読んでいてもどかしく思いました。しかし、「話しましょう。私の過去を残らず、あなたに話して上げましょう。」と言った時に告白の決心、自分の中から闇を人に伝える事によってもう一度人を信じる事、闇からの開放、改ためて懺悔というものだったのではないかと思います。人に自分の後悔した出来事、懺悔する出来事を伝えるという事はとても勇気のいる行動です。その勇気ある決心がこの一行に、表されていると思います。先生の事を振り返ると先生はいつしか積み重なりに大きく深くなった闇の重さに耐えられなくなっていたのだと思います。主人公のただ真面目で単純な人柄に先生は最後の希みのような気持ちから決心できたのではないか、そして初めて主人公との間に壁がなくなった瞬間だったのではないかと思います。この様に先生の気持ちを推測していくと、読み終えた直後の感想から本の印象が大きく変わってきました。深い闇はあるのですが、主人公の人柄が明るい希望となり、先生の心に届いたのだと思えました。死ぬ前にたった一人でもいいから人を信用して死にたい。と本音を伝えられた事、秘密の共有、主人公と先生の信頼関係が最後に築けた事はとても大きかったです。

人には誰しも度合いはそれぞれでも闇は存在すると思います。先生の言うように、善人も悪人となる事があります。しかし、悪い事ばかりではないと主人公と先生を通して思えました。裏切られ、裏切りがあったが、人間不信のような大きな闇からもう一度人を信じ

る事が出来た先生は懺悔出来たと思います。

私はまだ十数年しか生きていません。この先どの様な事が起きるかわからないです。裏切る事、裏切られる事、日常が一変する様な事があるかも知れません。しかし、生きていく中で人を信じ、心の闇を包み込む前向きな心を持っていたいと強く思います。

主人公の真面目さ、先生の人を信じたいと願った気持ち、この本を回想して分かった事です。心の多様性、色々な経験から生まれるものだと思います。

《中学生の部》

佳作

「人の心における矛盾」

成城中学校 2年

中野 裕太

作品名『こころ』

選んだ一行

人間を愛しうる人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐にはいろいろとするものを、手をひろげて抱き締めることのできない人、—これが先生であった。

人の心は複雑である。私は『こころ』を読んで「人の心の矛盾」について考えさせられた。そのきっかけとなったのがこの一文である。先生は「人を愛せずにはいられない人」であるのに「自分の懐にはいろいろとするものを、手を広げて抱き締めることのできない人」なのである。この一文に私は切なさを覚えた。矛盾とは切ないものである。

又先生は、自分を欺いた叔父を憎み、自分だけはそんな人間ではないと強く思っていたはずなのに、気が付くと自分も同じように親友を欺き、死に追いやってしまった。そこには、先生の中にある「正義感」と「裏切りの心」が矛盾しながらも葛藤し混在している。親友への罪悪感とは自分の中にある正義への罪悪感であり、先生はその罪悪感と妻への愛情の狭間で葛藤し続ける。しかし、その親友が自殺したのちも、「罪悪感」を抱きながらも結局は世間体を気にして保身に回ってしまうのである。更には「人を信じたい」と思っているのに「人を信じてはいけない」と自分に言い聞かせている。本当に人の心とは複雑で矛盾したものである。

瀬石は、人間が誰しも持っている正義感とエゴイズムの矛盾、そしてその両者の間で揺れ動く心の葛藤を描いているのである。そしてその人の正義感とエゴイズムは、その時の状況によってどちらの立場にも変化し得るという事を、私達に教えてくれているように思う。人間とはそういう哀しい生き物であるのだと言っているかのよ

うだ。

自分だけは叔父のような人間ではないと自身を信じていた先生が、実は自分にも叔父と同じような心があったと気付いた時の衝撃はいかばかりであっただろう。

先生は自分さえも信じることができなくなり、そして叔父と同様に自らを憎むようになった。今まで軽べつしてきた人間と自分をひとくりにしなければならぬ先生の心は、どれ程絶望の淵に瀕していたのだろう。

しかしそうしながらも、先生の心の中の矛盾と葛藤は最期まで続く。「私の過去を善悪ともに、ひとの参考に供するつもり」としながらも、「妻にはなんにも知らせたくない」としている。これは一見、妻のためにとしながらも、もう一方で私には先生の保身にも思えた。先生は「人間を愛せずにはいられない人」でありながら「自分の懐にはいろいろとする者を手を広げて抱き締めることのできない人」なのである。言いかえれば、手を広げて抱き締めることはできないが、人を愛せずにはいられない人だったのである。

人間とは常に矛盾の中で葛藤しながら生きていくものである。これは、現代においても言えることである。それを承知した上で私達は生きる上で何を選択していくのか、しっかり考えなければならぬのであろう。

生きて生きる

成城中学校 2年

和田 宙丸

作品名『坑夫』

選んだ一行

墮落の底に死んで生きる・墮落したと自覚しながら、生きて働いている

夏目漱石といえば『吾輩は猫である』とか『坊っちゃん』が有名だと思う。でも周りが選びそうなものを選んでもありきたりな文になってしまいそうなので、あえて「何これ：」と思うような聞いたことのない本を読もうと思った。それで本屋に行ってみたら思っていたような本を見つけたので購入。冒頭を読んでみすぐに後悔した。葎簀・床几・久留米絋：訳の分からぬ言葉が続いている。何でこんな本を買ってしまったのだろう。『坊っちゃん』や『吾輩は猫である』等は読んだことこそないものの、少なくとも『坑夫』よりは分かりやすい、と思う。四ページにわたっての主人公の心情を描

いた箇所は卒倒するくらいの圧倒的字数に、視力を幾分か奪われた気がする。とにかく分かりにくい文章の前に、必死に脳内の想像力と語彙力をフル回転し、頑張って読み終えた。読み終えた後小さく「疲れたー。」と言ってしまう程頭使った。しかしこんなに批判ばかりしていて「なら違う本にすればいいじゃない」と言われそうなのだが、こんなに批判していてもこの本を選んで感想文を書いているのには、一応理由がある。それはこの二つの文章が心の隅にずっと残っているからである。「墮落の底に死んで生きてる」、「墮落したと自覚しながら、生きて働いている」。これらの文書が心に残っている理由は、主に読書時の私自身の生活習慣によるものである。この時の私といえば、朝登校寸前に布団から飛び起き、遅刻しないために蒸し暑い満員電車に体を捻じ込み、部内では昼休みを待ち望みながら練習し、家に帰っては宿題もせずにゲーム、という墮落そのものの日々を送っていた。そんな時に限って「このままじゃだめだ。」とか「宿題終わんないぞ。」とか思うにもかかわらず、どうにもこうにも実行できない。「墮落したと自覚」とはこういうことである。

作中では銅山で働く男達には「楽しみがない」と思った。彼らは「楽しみがない」、すなわち娯楽がない中で必死に「楽しみ」を探し、その結果死体や新米を馬鹿にする。「生きる」ではなく「活きる」というのは「こういうこと」である。この二文の間には文が一つもない。それなのに「活きる」と「生きる」が共存している。そして

この二文の後にはこう続く。「生きて―自分を救おうとしている。」「生きる」ことはもがくことである。墮落した自分を必死に押し上げようともがくことである。もがく中で心を満たそうと無理にでも「楽しみ」を探すこともある。しかし活きよとした結果が作中の坑夫らのようになるのなら、やっぱり人生墮落したくはないものである。人によって「墮落」の線引きは違う。それだから、この世から犯罪が消えないのである。けれど、そんなことを考えている時間があるのなら、とりあえず終わっていない宿題をとっと片付けてしまおう。

《中学生の部》

佳作

「勇気」をもって立派な人へ

大妻中学校 1年

小山 明華

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

「したものはしたので、しないものはしないにきまってる」

私が、もしも重きな罪を犯してしまったとき、それを「正直」に白状できるだろうか。きっとその罪が大きくなればなるほど、人はみな「正直」になれなくなるはずだ。私もなおさら正直になれなくなる。なぜなら、私はたとえ小さな罪を犯してしまったとしても、それをためらわず「正直」に白状できないからだ。いつもあともうひと踏ん張りのところで、でかけていた言葉が重いおもりのようなものでふさがれてしまう。

こんな自分に悩むようになった頃、「坊っちゃん」にあったある一文が心に残った。

「したものはしたので、しないものはしないにきまってる」。私はこの文を読んだとき、「本当にそうだな。」と思った。このお話の中の罪というのは、生徒が坊っちゃんの布団の中にイナゴをたくさん入れたことだが、それを生徒達は初め、「やっっていない。」とうそをついた。しかも、いつまで経っても白状しない。たいした罪ではないはずなのに、「正直」になることができない生徒達の姿はまるで私のようなだった。罪を犯してしまったのなら、もう過去は取り戻せない。「したものはした」。だから、自分が犯してしまった罪を「正直」に白状するしかないのだと気が付いた。

この一文で私は、自分が「正直」になるために必要なものも見つけた。それは「勇気」だった。あの重いおもりは「恐怖」であり、「勇気」を閉じ込めていたのだ。一見、「勇気」と「正直」は関係無

さそうに思うかもしれない。でも私が「正直」になるためには、「勇氣」が必要なのだ。なぜなら、罪を白状するときに私はいつも怒られることを恐れてしまい、白状する勇氣をどうしても持てなくなるからだ。きっと私は、自分が罪を犯しているくせに、怒られるのを恐れる弱い人間だったんだ。でも、今落ち着いて考えてみると、もし自分が罪を犯してしまったことに対して、心から反省したのなら、あとはすぐ白状して、もう二度と罪を犯さなければいいのでは、とも思える。私が思う、罪を犯してしまったあとにその人がすべきことは、心から反省をし、「正直」に白状すること。だから、罪を犯すのはよくないことだけど、本当に心から反省をし、「正直」に白状できたなら、その人は誰よりも強い心を持つ「立派な人」へと成長できる気がする。しかし、やっぱりまだ私にはすぐ白状することが難しいため、まずは「勇氣」を持つことから頑張っていこうと思う。

結果、あの一文は私に「勇氣」を与えてくれた。「得たものが少ない。」と思う人がいるかもしれないが、私には十分だ。なぜなら、この「勇氣」こそが私が「正直」になるためのかぎだったからだ。私はこれから、罪を犯しても「勇氣」をもって「正直」に白状できる、立派な人になれるよう頑張りたい。

《中学生の部》

佳作

一文で伝わること

暁星中学校 1年

關谷 藍

作品名『それから』

選んだ一行

門野はそれを洋卓の上に置いて、又縁側へ出たが、出掛に、「もう、そろそろ蛍が出る時分ですな」と云った。

今回、選んだ夏目漱石の一文は、新潮文庫「それから」の百八十四ページ、「門野はそれを洋卓の上に置いて、又縁側へ出たが、出掛に、「もう、そろそろ蛍が出る時分ですな」と云った。」という一文です。この文からわかることは、蛍が出ると言っているのが6月頃とわかります。6月より少し前、つまり5月下旬なので少しづつ熱くなって来る時期でしょう。この文では門野の服装については何も言及されていませんが、少しづつ熱くなってくる時期なのでおそらく風通しの良い服を着ているのであろうと思われます。また、蛍が出る、と言っているということは、蛍が出そうなことを知らせた

いわけであり、わざわざ知らせなくても良い様なことであることから、門野が代助をたまには蛭でも見に出かけるように促しているともとれます。これらのことは、すべて文章自体には書いていないこととであり、人によって解釈が違おうでしょう。しかし、一見本文には関係ない文にもこう云う風に解釈の自由が含まれているところが一番好きな文である理由です。また、先ほど言ったように、蛭が出ているという台詞は他の解釈もできます。例えば代助にただ単に気になった話を振っただけかもしれないとも判断できます。しかし、それではあまり面白くありません。そういうつもりで書いたのかもしれないませんが、深い意味で受け取ってこそ本当に楽しめるのだと僕は思います。他の解釈の仕方としては、代助に季節感をはっきりさせるために云ったのかもしれないし、代助が思い悩むことをあらかじめ予測して、景気づけのような意味合いで言ったのかもしれない。人間はよっぽど疲れていない限り、意識して発言すると思われず。なので、門野は上のようなことを考えて発言したと思うほうがごく自然です。しかし、これは小説の一文にすぎません。一文、一文がこのように考えさせることができる文になっているから、物語もさることながら不思議な文章、もとい世界観が成り立っているのかもしれない。ほかに注目すべきところは洋卓という単語です。今ではほとんどの作品では見かけられませんが、(たまに見かけたりします)書かれた時代を感じるすることができます。

夏目漱石の作品はどれも基本的に読んだ後に考えさせられる作品

です。(たまに不思議な感じを残したまま終わるときもあります)この読書感想文を書くことによって、改めて、夏目漱石の作品群が特別な印象を残す理由に気づくことができたような気がします。

《中学生の部》

佳作

こんな夢をみた

文京区立茗台中学校 3年

牧野 賢士

作品名 『夢十夜』

選んだ一行

ところが—自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなった。

「ところが—自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなった」という一文に興味を感じた。

漱石の作品「夢十夜」は、それぞれ意外性や幻想的な雰囲気などを感じる面白いものだと思う。その中で一番印象に残っているのが、第七夜のこの一文だ。

第七夜、大きな船に乗っている夢の話。その船は毎日毎夜、少しの絶間なく黒い煙を吐いて浪を切って進んでいく。けれども、何処へ行くのかは分からない。水夫に聞いても、はっきりしない。異人の様ないでたちの人もいるのだが、誰も普通ではない様子である。主人公は、とうとう死ぬことを決意する。いつ陸に上られるのか分からない船に乗り続けることの苦痛が、極限に達したのだろう。ついに、海の中へ身を投じた。

だが、ここで急に命が惜しくなった。どこへ行くのか分からない船でも、やっぱり乗っている方が良かったと悟るが、無限の後悔と恐怖を抱いて黒い波の方へ静かに落ちていった。

漱石は、この夢をどんな気持ちで書いたのだろうか。実際に同じような夢を見たのかもしれない。有名な「草枕」の一文では、この世の住みにくさを嘆いている。それでも、なんとか社会と折り合いをつけて生きてゆこうとする。そこには、どうにもならないやるせなさを感じる。一方、すべてを投げ出して、やめてしまおうとする諦めの気持ちも感じた。この二つの気持ちの葛藤が、この作品に垣間見える。

以前、私は、音も光も色もない空間をひたすら走り続ける夢をみたことがあった。深い穴のような所に落ちて目覚める。何とも心地の悪い気持ちで起きたのを覚えている。見る夢と現実の世界には、何らかの関連があるだろう。私は自分の夢のことは覚えているけれども、それに関連するような出来事は思い出すことができない。

第七夜で主人公は、自分のとった行動を深く後悔している。それを、ただの夢で済ますこともできるだろう。ただ、私はこの後悔の思いが気になった。その意味するものを考えさせることになる。さらに、私が昔見た夢にも思いをはせることになったのだ。

人は一生のうちに、様々な夢を見る。記憶に残る夢は、なぜか美しいものよりも苦々しいものが多いようだ。第七夜の夢に、共感を覚えたのも、その点が関係していると思う。

なぜ、人は夢を見るのか。夢は何を意味しているのだろうか。将来、これらのことを追究するのも悪くないと思った。

「優しさ」を拒絶する先生

筑波大学附属中学校 2年

鈴木 愛渚

作品名『ころ』

選んだ一行

私は最初から先生には近づき難い不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければならぬという感じが、何処かに強く働いた

人から「優しさ」を感じるのとはどのようなときだろうか。私は作品を通じて、「先生」が一貫してひどく寂しい存在に感じられた。それは、「私は寂しい人間です」と自身が自覚している以上だと思ふ。私達が「寂しい」という時は、共有してほしいという気持ちが多量なりとも込められているだろう。しかし、先生の「寂しい」には、それが感じられない。私は先生の精神の周りに、他者の「優しさ」が纏いつく余地を感じなかった。この精神構造は、いかにして形成されたのだろうか。

先生は両親を失い、財産を叔父に託して東京の高校に進むが、後に裏切りに気づく。財産を処分し、二度と故郷の土を踏まなかった先生に「人間というものを、一般に憎むことを覚えた」とまで言われたこの事件が人間形成に影響を与えたのは間違いない。しかし、決定的とまでは言えない。何故なら先生は、人の弱さや罪深さを嘆きつつ、己は高潔に生きようとしたからだ。「世間はどうかろうともこの己は立派な人間だ」という信念」と手紙にある。その真つ當に清く生きたいという気持ちに私は共感する。

先生は奥さんと御嬢さんの家に下宿し、Kが加わる。先生と勘当されたKの精神的立ち位置は奇妙に似ている。

二人は孤独と寂しさを抱えながら高潔で志高い青年を目指した。しかし経過は違いこそすれ、二人とも自ら死を引き寄せていく。

Kはあらゆる欲望を禁じた求道者だった。Kの「覚悟、—覚悟ならない事もない」の呟きと、「もっと早く死ぬべきだったのになぜここまで生きてしまったのだろう」は、一貫している。Kは自分を裁いた。恋は外道であり、己への裏切りだった。それはKにとって耐え難い「寂しさ」だったのだろう。

先生の苦悩は、Kが自害し、結婚した後からだ。生前のKへの嫉妬は次第に激しくなり、手段を選ばなくなる。復讐以上に残酷な「精神的に向上心の無いものは馬鹿だ」はその最たるものだ。しかし先生は己の残酷な本性にKが死んで初めて気付く。自分も叔父と同じ程度の人間だと自覚し、絶望感に苛まされる。

しかし、妻がいた先生は、Kと同じ手段は取らなかった。しかし、先生は自らをますます絶対的孤独に追いこんでいく。

「私」は先生を「人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手をひろげて抱きしめる事のできない人」と評している。

先生の精神の周りに、他者の「優しさ」が纏いつく余地が感じられないのは、これが原因ではないかと思う。先生は御嬢さんを愛した。御嬢さんも先生を愛した。しかし先生は最後まで苦悩の告白をすることはなかった。

その選択は、先生の中で完結しすぎている。「先生」が、一貫してひどく寂しい存在に感じられるのはそのせいなのだろう。

《中学生の部》

佳作

過去と自殺

大阪教育大学附属平野中学校 3年

加々尾 真歩

作品名 『こころ』

選んだ一行

あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼った。私はその時心の中で、はじめてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或るいきたものを捉まえようという決心をみせたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を啜ろうとしたからです。

「あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼った。私はその時心の中で、はじめてあなたを尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或るいきたものを捉まえようという決心をみせたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を啜ろうとしたからです。」

なんと激しい言葉だろうか。喜びと尊敬と愛情が伝わってくる。小説「こころ」の先生が、生涯の翳りを生んだ重い過去を伝える相手として、自分を慕う青年を認めたときの正直な気持ちでしょう。この言葉は小説全体を繰り返し読んで、先生の自殺の理由と、伝えるのが死ぬ直前でないといけない理由を自分なりに見つけ出そうとしたきっかけとなりました。

先生が自殺を考える理由は明らかでした。罪悪感と孤独、「自分は生きるに値しない」と囁きかける自分の内なる声。自殺は断罪であり、生き地獄からの脱出でもあったでしょう。でも先生は妻を愛していたから、「命を引きずって生きてき」ていて、青年が問うた時は「まだ死ぬのが嫌だった」のです。それが「明治の精神に殉死する」かたちであっけなく決断してしまったのが不思議でした。

「明治の精神」とは何かについて手がかりを探すと「自由と独立」と己れに満ち、その犠牲として孤独に耐えなければいけない」時代だと時代は語っていました。過去の習慣や常識、組織から離れて、自分独自の人まねでない生き方を求める精神、ということでしょうか。明治時代は急速に発達した社会と、変わらない意識を持った人たちが混在して反目し合い、新しい生き方をする人にとっては生きにくく、孤独もその結果起こると考えられます。Kは自由、独立、己れを追及しようとして、親を欺き、財源を失って疲れ果て精神を病みました。先生は自分を欺いた伯父が万事丸く収めようと計らったことを嫌い人間不信になりました。二人とも明治の精神の影響を

受けて奮闘しました。急速な欧米化とそれについていけない者・物との関係に似ています。

先生は、前進したくても暗い過去を振り切れず、愛することも存分にできない自分を、明治の終わりとともに終わりにした、というのが私の解釈です。

先生は青年を信頼しましたが、人と深い心のつながりを持った後の自分は信頼できなかったと思います。妻を占有するために、自分が最も嫌う卑怯なやり方で裏切り、その事が生涯の翳りとなった。翳りの存在を感じた妻は充分幸福だったとはいえない。だから先生は、青年に過去を告白し、より深いつながりができる前に自分を無害な状態にする必要があったのだと思います。これが告白が死の直前である理由だと解釈しました。

自分の過去から生きた教訓を抽出し、それを次世代に伝えてくれる青年を得て、先生は満足だったと思います。

多勢を恃んで一人を馬鹿にする勿れ

日本放送協会学園高等学校 3年

浅田 恵果

作品名『漱石人生論集』の愚見数則より

選んだ一行

多勢を恃んで一人を馬鹿にする勿れ、己の無気力なるを天下に吹聴するに異ならず

「多勢を恃んで一人を馬鹿にする勿れ、己の無気力なるを天下に吹聴するに異ならず…」が私にとって、夏目漱石の作品の中で最も心に響いた一行だ。これは、『愚見数則』に出てくる言葉だ。『愚見数則』とは、明治二十八年愛媛県尋常中学校の英語の教師時代に書かれた漱石のエッセイである。いわば生徒へのメッセージ文である。三十近いメッセージは、珠玉の教えの数々で、私は是非これを教科書に載せてほしいと切に願っている。

初めてこの言葉にふれた時、私はとても快い胸のすくような思いがした。なぜなら、昨今のいじめ問題に関して、これまでのニュー

スやコメンテーターの専門家が「今はそういう時代で」とか、「いじめる社会背景が」とか、「少年少女の心の問題で」等と決めつける風潮に、釈然としなかったからだ。しかし明治時代に、漱石ははっきりと「それはダメだ!」と、いじめる側を毅然と批判した。ストーンと腑に落ちた気がした。しかもそれを、日本文学の大家夏目漱石が述べている、この事実が私にとってはとても嬉しい。

日本では、いじめ問題が今なお深刻な問題で、いじめが原因の小中高生の自殺者数が、減ってはいない悲しい現実がある。だからこそ漱石のこの言葉は、時代を超えて普遍的であり、今日的意義が深いといえよう。

『愚見数則』では「多勢でいじめをする人は、自分が無気力であることを言いふらす」だけでなく「人間の糟」であり何の価値もない、と明快な文で続けている。もし教育現場で漱石のこの教えが浸透したならば、子ども達自身も、いじめは自分を無気力だと示し、自分を人間の糟にまでおとしめる、愚かな行為だと自覚できるのではないだろうか。

漱石の文は厳しくとも、ふとユーモアと優しさを滲ませるので、一層読者の心に届く。思わず「憎いねえ、やるじゃないか!」と言いたくなる。例えば、いじめは「己れの無気力なるを天下に吹聴するに異ならず…人間の糟なり」と批判すると同時に、「豆腐の糟は馬が食う」が「人間の糟は蝦夷松前の果へ行ても売れる事ではなし」とユーモアで締めている。又漱石の猫は「見識」を有している

『吾輩は猫である』より) というのに、漱石本人は「愚見」を述べていることも可笑しい。

漱石の代表的作品の『坊っちゃん』も、痛快なストーリーで色あせず輝いており『愚見数則』同様、漱石の真直ぐで、理想高く、清々しく生きるテーマを感じる。だが、生徒一人一人への温かくて真直ぐな思いが、直に伝わるのはやはり『愚見数則』であろう。教師と生徒の上下関係の厳しさを容易に想像できる時代に、柔軟かつ毅然とした発想を持つに至った漱石の秘密も、私は知りたい。これからも、漱石の作品を通じて、理想高き人生を学びつつ、漱石の目から見て、私は真直ぐな人、学問を追求する人でありたいと思う。

審査講評

素直さ、強さがあり、書きっぷりが痛快。いじめなど、現代の社会問題と結び付けて、学ぶところ多しと現代的な受け止め方をしている。漱石がまだ20代の時の論を高校生が読み解くことも興味深い。

《高校生の部》

優 秀 賞

「知らず嫌い」

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 2年

中川 美咲

作品名 『三四郎』

選んだ一行

その薔薇が椎の木陰の下の、黒い髪の中で際立って光っていた。

東京の娘と言われればどんな人を思い浮かべるだろうか。現代の東京の娘を私なりに解釈すれば、化粧っ気の濃い、見栄張りでもいい田舎者を下に見ている、というところだろうか。良いイメージを持たないのは私が単に東京が嫌いだからであろう。東京には行ったことがないのになぜ嫌いなのだろうか。自分でもよく分からない。ただ、人参を食べたことのない人が人参を嫌いと言っているような感覚、「食わず嫌い」ならず「行かず嫌い」といったところであろうか。

三四郎を読むきっかけになったのは、国語の授業で扱ったからで

ある。読んでいくうちに東京へ行くことが分かり、少し落胆した。なぜ人間は東京へ行ったがるんだろう、東京にはなんでもあるわけじゃないぞ、と心の中で三四郎に訴えた。名古屋での宿で臆病な三四郎を見ているとこちらまではらはらした。臆病な三四郎がこんなことで東京でやっていけるのか、と母親になった気持ちで読んでいた。

東京に着き、三四郎は二人の女性を見る。ああ、また東京のくだらない女かと、自分が同じ女であることを忘れそうになった。しかし、その二人の女は植物を見ていた。植物を眺める女の姿を想像して、自分の持つ東京の女の先入観と比べ、この二人に少し関心を持った。自分の持つ先入観は、椎の木なんかにもくれず、さっさと歩くものであったからだ。しかも、二人のうちの若いほうの女は頭にも真白な薔薇を一つ挿しているという。

自分は花が大好きだ。咲けよと言われてもないのに、雨の日風の日すり抜けて小さな小さな花を一つ、道のわきに健気に咲くその姿が愛おしくてたまらない。だから自分は、花を身体に飾る女性は自信に満ち溢れているようで大変美しいと思っている。そして私が心に響いた一文、「その薔薇が椎の木陰の下、黒い髪の中で際立って光っていた。」椎の木独自の自然光を浴びる女を想像し、私は三四郎と同じく茫然してしまった。美しい。その言葉で私は人間の美しさを一旦考えてしまった。東京の女は下品であると言い張っていた自分に後悔した。自分が東京を嫌っていたのは、「行かず嫌い」

でもなく「知らず嫌い」ではないか。三四郎は恋愛小説の一つだと思っていたが、自分なりの解釈をすると美しさを学ぶ学習小説ではないか。
今度、東京へ行こうと思う。「知らず嫌い」でおわらせないために。

審査講評

自分のことを書き、何が是で何が非か、きっちり触れられている。ローカルなものを自分なりに抱いている印象を受けた。「学習小説」という言葉を出しているのも面白い着想だった。

真面目さ

新潟明訓高等学校 3年

渡辺 はるか

作品名 『こころ』

選んだ一行

あなたは腹の底から真面目ですか

『あなたは腹の底から真面目ですか』

私はふとこの一行に目が止まった。これは「私」が「先生」の過去を暴こうとした時に「先生」が言った言葉だ。「先生」は「私」に何度も真面目かどうかを尋ねていた。自分の過去を告白して良い相手なのか、本当に信用できるのかどうかを見極めたかったのだ。そして「先生」が最後に尋ねた言葉がこれだった。

「先生」が言っている「真面目」とは、自分と他人との関係性における真面目さのことだろう。それは相手と自分が互いに信頼し合っていて、決して裏切ることがないような関係だ。だから「先生」にとって唯一無二の存在に「私」がなれるのか、なってくれるのかを確か

めるためにあれほど執拗に「真面目」であることにこだわったのだ。私がこの一行で目が止まったのは、私自身が「真面目」ではないからだ。私は人間関係において、これまで広く浅く関係を築いてきた。私は誰かと一緒にいることを求めている。だからできるだけ多くの時間を誰かと過ごせるように、多くの人との表面的な関係だけを築いてきた。しかし裏を返せばそれは一緒にいられるのなら誰でもいいということだ。私には何でも話せる本当の意味での友人はいない。一人の時ではなく、誰かという時に私は強く孤独を感じる。それは自分のエゴイズムに嫌気が差し、自ら一人でいることを選びながらも「私」という他人をやはり求めざるを得ない「先生」とよく似ている。私は自分が「真面目」ではないにもかかわらず、「先生」と同様に「真面目」な誰かと深い関係にありたいのだ。

「先生」の遺書を全て読んだ後の「私」のことは一切書かれていない。それはもちろん読者の想像や解釈を膨らませるという意味もあるだろうが、「私」がどう感じたかよりも読み手自身がどう感じたかを漱石は大切にしていたのではないかと私は考えた。「私」の心情を書いてしまえば良くも悪くも読者の心情に影響してしまう。漱石はそれを避け、読者に自分と向き合っただけで欲しかったのではないだろうか。

私自身、「私」のことが書かれていなかったことで、「こころ」を読み終えた後、自分はどう思ったかだけに集中できた。そしてもう一度あの一行に戻った時、「先生」が求めた「真面目」は漱石も求

めていたのだろうと思った。文明開化の波で他者との関係が希薄なものになってしまったことを憂っていたのだ。それは現代にもあてはまる。さまざまな情報が溢れ、物質的に豊かな現代社会では、他者との関係性がないがしろにされ、表面的なものになっている。「こころ」は明治時代に書かれた作品だが、百年以上経った今でも読み継がれているのは人間関係の本質を突いた作品だからだろう。

審査講評

「真面目さ」を自分と他者との関係性における「真面目さ」と捉えて、現代への考察に繋げている。「あなたは腹の底から真面目ですか」は漱石から読者への問いかけでもあり、自分がどう思うかをきちんと書いている。

《高校生の部》

紀伊國屋書店賞

美禰子という女性

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 2年

吉田 眞生

作品名『三四郎』

選んだ一行

「私そんなに生意気に見えますか」

ズルい。彼女は本当にズルい。自分が好意を抱いている美しい彼女にそんなことを言われて何か言葉を返せるわけがないのだ。三四郎目線で描かれる美禰子はずくづく魔性の女であった。ところが時々美禰子本人は自分のことをそうは思っていないような節もうかがえるのだ。同じ女性として、そういう所もズルい女だと思える一因なのだ。だが、読みすすめるうちに美禰子という人物がわからなくなってきた。計算高いのか、純粹であるのか。主要人物である三四郎の影から彼女をすくいだし、本当の気持ちはどこにあるのか考えてみようと思う。

美禰子の登場は秀麗であった。赤、白、黒で彩られた登場シーン

はそれまでの味気なく地味であった第二章に視覚的変化をもたらす。しかし女の名はわからない。わからないということが女をより一層美しくするのである。一方で三四郎は見惚れるばかりで声の一つもかけようとならない。美禰子の「異色」の登場は三四郎の度胸のなさにより、また味気ない日常へと戻されてしまうのだ。

冒頭でも述べたように、私にはどうしても彼女が魔性の女のように思えてしかたない。というのは、彼女が誰に対しても気があるように見えるからである。主に元々恋仲であった野々宮、自分と同じ「迷える子」であると話した三四郎。美禰子は二人に自分の気持ち分散させることで、二人をやきもきさせ、それぞれに「美禰子」という存在を強く印象付けていくのだ。だが彼らに自分を印象付けてどうしようというわけでもない。ただただ弄ぶように彼ら二人の中の「美禰子」という存在をどんどん大きくしたのである。三四郎はそれに気付いていた。だが彼女の気持ちはどこにあるのかわからない状態ではどうすることもできず、美禰子に押し流されてしまうのだ。

結論として美禰子が誰を好きであったか明確なことは言えないだろう。三四郎は美禰子とよし子の間で揺れ、美禰子との仲を深めることが出来ない「迷える子」であった。ずっと大人びて見えた美禰子もまた同じように「迷える子」だったのだろう。好意を垣間見せ、二人を愚弄した美禰子であったが、どちらに対しても恋仲になるつもりは無かったと思う。その好意は恋愛的な意味を持つものではな

く自己顕示のための好意だったのではなからうか。自己顕示を続けるうちに自分が何をしたいのかわからなくなる。そうして美禰子も「迷える子」となってしまふのだ。三四郎なんかよりも深いところに来てしまった「迷える子」に。美禰子には二人への罪の意識が芽生え、もう二人と親しい仲に戻るのには難しいだろう。そして美禰子は別の男性と結婚してしまうのだ。最後は美禰子の意図的なすれ違いによって三人は交わることなく、長い半年間を終えたのだ。

審査講評

達者な文章で、特定の女性に的を絞り、引きつけている。同じ女性として美禰子の気持ちと行動を判ろうとし、理解できないもどかしさを持ちつつも、自分の考え・感情をよく表現している。

心の舟

長野清泉女学院高等学校 2年

松沢 早織

作品名『硝子戸の中』

選んだ一行

然し書齋に独り坐って、頬杖を突いたまま、流れを下る舟のように、心を自由に遊ばせておくと、時々私の聯想が、喜久井町の四字にぱたりと出会ったなり、其所でしばらく低徊し始めることがある。

「然し書齋に独り坐って、頬杖を突いたまま、流れを下る舟のよ
うに、心を自由に遊ばせておくと、時々私の聯想が、喜久井町の四
字にぱたりと出会ったなり、其所でしばらく低徊し始めることがあ
る。」

漱石の「硝子戸の中」に登場するこの一文は、彼が住んでいた喜
久井町について語っているときの言葉だ。彼に縁故の深かったこの
町の名前は、あまりにも聞き慣れていたせいで、漱石の過去を誘い

出すような響きではなかったようだ。しかし、書齋で独り、頬杖を
ついて心を自由に遊ばせておくと、流れを下っていた漱石の心の舟
は喜久井町の四字に出会うなり思いふけてその周りをゆっくりと
まわる。

漱石の心の舟には、漱石自身が乗っているように思える。そして、
心の舟を持っているのは彼だけではないはずだ。私にも、誰にでも
一人に一艘与えられている。人生という長い川をそれぞれがおかし
な方向へ流れないように、上手に漕げるように、そして他の人から
上手く自分の舟がコントロールできているように見えるために必死
に漕いでいる。川の中にあつた石の輝きにも、傍らに咲いていた小
さな花の力強さにも気付けないほど、自分の舟のことで精一杯にな
ってしまうのが人生だと私は思う。そんな人生の川下りの中で、あ
えて漕がずに流れのままに流されることで、自分の過去に誘い出さ
れたのが漱石の舟だ。先へ先へと進む無数の舟の間を抜け出し小さ
な花の力強さにたった一人気付いたような、そんな感覚がした。

時が経つにつれて、いつしか心の舟は自分で漕がずとも勝手に進
んでゆく便利な舟へと変わっていった。そのせいで、舟が壊れたと
き自分で漕げない人や、違う方向に行ってしまった自分の舟を立て
直すことが出来ない人が多いように思える。自分でどうすることも
出来ないときあらめた舟は川の端で動かなくなり朽ちていく。また、
上手に進んでいるように見えてほしくて、表面だけを取り繕った舟も
多い。いつかは手を抜いた内面が姿を見せ、これもまた動かなくな

ってしまう。結局、川を下れているのは自分の力で漕いでいる人やまわりの舟のことを考えて漕いでいる人、川の端から端まで見渡せて漱石のように時には漕ぐ手を休められるような人たちだけなのかもしれない。私の漕いでいる舟はどうだろうか。川を下れているのだろうか。きっと今までの私はたくさんの景色に気付かず、上手に漕ぐことに精一杯だっただろう。だが、私の川下りはまだゴールには程遠い。気付かなかったものより、これから気付くもののほうが多いはずだ。これからの人生で感じる景色を大切にしていきたい。

審査講評

タイトルが素晴らしい。豊かな文章力にも感心した。人生を川に例える中で、川の中の石の輝きや岸辺に咲く小さな花の力強さにも気付けないほど自分の舟を漕ぐのに精一杯…という比喩が見事だった。

《高校生の部》

早稲田大学賞

現代に百合を咲かすために

白百合学園高等学校 3年

坂本 早希

作品名『夢十夜』

選んだ一行

「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気が付いた。

一年前、神奈川近代文学館の夏目漱石展へ行った。丁度漱石没後百年であった。そこで塩原金之助と記された漢文作文や五女ひな子の写真、使用していたインク壺をはじめとする数多くの遺品を見て、彼の半生を思い返すとともに、かつて彼が本当に生きていたのだということを、初めて実感した。

私は漱石と同じ卯年生まれである。歳は百三十二歳違う。漱石作品を読むといつも、彼の生きた時代と、私の生きる現代との間に大きな隔りを感じ、心に穴があいたような気がした。それは、広島の大原爆ドームに行ったときや、東日本大震災後、アレクシェービッチ

の『チェルノブイリの祈り』を読んだときに感じた、過去を忘れてしまいがちな現代社会に対する不安とよく似ていた。私の友人は、本屋大賞の本は読むけれど、川端康成は読まなかった。ハリポッターを互いに語り合うことはあっても、『即興詩人』を読んだことのある者は一人もなかった。私が文学を愛し、過去に近づこうとすればするほど、現代から取り残されていくように思った。人は忘れる生き物で、忘れることで救われることもあるのだろう。だが、唯一の被爆国でありながら、核保有に反対しない、過去の事故の被災者の嘆きを知っていながら、さらなる悲劇を引き起こす現代社会が、私は恐ろしい。過去から学ばず、過ちを繰り返すこの社会に、未来はあるのだろうか。

『夢十夜』「第一夜」で男は赤い目を勘定しながら、女に欺されたのではないかと思ひ出す。しかし、彼女を信じていたから、百合は咲くことができた。「百年はもう来ていた」のだ。現代社会にも、同じことが言えるのだろうか。漱石の没後百年間、数々の遺品は、彼を愛するものたちの手によって守られ、受け継がれ、過去の息づかいを現代の少女に伝えた。日本だけでない世界の、光と闇、両面を持った遺産たちは、人々によって見守られ、将来への贈り物となっていくのだろうか。だから私は思うのだ。思い出さなくてはならないと。男が女の再来を待ちながら墓を守り続けたように、過去の記憶を保護していくことは今までも、そしてこれからも可能なことだ。そして、私たちがやらなくてはならないことは、ただ守るだけでは

なく、折に触れて思い出し、歴史が伝えるありのままの事実を信じていることだ。過ちを繰り返さないために。

私の将来の夢は、日本文学の研究者になることだ。漱石や鷗外をはじめ、時代を見つめ近代化に警鐘を鳴らしてきた文人は数多くいる。彼らの声は現代の問題の解決への糸口となる。過去を振り返り、信じ、現代社会の問題を解決していくために献身することが、文学部での学びを夢見る私の決意である。∴そして、文学部で、私と同様に文学を愛する友人を見つけ、漱石と子規のような、生涯変わらぬ友情を築けていけたら重畳だ。

審査講評

まっしぐらな構想力があり、筋が通っていて力強い。現代の日本が直面しつつもなまなまにやり過ごしている問題をきちんと取り上げ、訴えかける言葉で書いている。『即興詩人』が出てくるのも嬉しい。

明治の開化と現在

早稲田大学高等学院 3年

佐藤 匠

作品名『夢十夜』

選んだ一行

とうとう死ぬことに決心した。

夏目漱石の「夢十夜」を読んで印象に残ったのは、第七夜の「とうとう死ぬことに決心した。」という一行である。

第七夜では、ある人物が自分の見ている夢の中でとある大きな船に乗っている場面から始まる。この船は西に向かっているというが、乗客も含め誰も具体的なことは知らない。彼はその様子に大変心細くつまらないと感じ、この一行の通り飛び降り自殺する。しかし飛び降りた後、命が惜しくなり、無限の後悔と恐怖を抱くことになった。

この作品の第七夜を初めて読んだのは、中学生のときであった。何が不満だったのか、また、なぜ不満だからといって飛び降りなけ

ればならなかったのか、そもそも後悔するのならばそのまま良かったのではないか、などと疑問に思った。しかし、結局どの疑問に対しても答えが出せず、よく分からないまま考えることを放棄した。そして、その後も考えることなく忘却していった。

しかし、高校生になって特にある二つのことを知ってから、第七夜のことを思い出し、もう一度読んでみてこの一行の意味が分かったような気がした。まず、知ったことの一つ目は、漱石の、「現代日本の開化」の講演などに代表される、明治の文明開化に対する批判的な考え方である。二つ目は、芥川龍之介の「舞踏会」などのように、文明開化が様々な作品を通して批判されたということだ。この二つの情報と、作品中の、西に向かっている乗客に異国人や西洋気触れの人がいる船、という描かれ方から、漱石の開化批判を連想した。第七夜の主人公は、文明開化の日本を表す船に乗り、どこに向かっているか分からない状況に嫌気が差し、「とうとう死ぬことに決心した」のだとそのとき解釈した。そして、表面的な開化の批判を巧みに表現していたことに対し、非常に面白いと感じた。

また、この作品で描かれる文明開化は、今日の日本にも共通するところがあるのでないかと考えた。インターネットの普及やグローバルリズムによるものだが、日本が大きく変動したという点は、文明開化のときと全く同じである。ただ、表面的な開化が世界規模で発生し、相容れない者同士の混在による衝突や戦争、テロの原因となっていることを考えると、日本に限定されない現在の方が危険で

あると思う。

そのため私は、日本や世界がこれから先どのようなになるのか予想できず、不安に思うことがある。しかし、そこで「死ぬことに決心し」て現状の流れから飛び降りようとは思わない。むしろ、「無限の後悔」をしないためにも、このまま日本という「船」に乗って、船の行き先を見てみたいと思っている。

《高校生の部》

佳作

漱石と文学、私のこれから

早稲田大学高等学院 3年

船越 峻

作品名 『漱石書簡集』

選んだ一行

「死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやってみたい。」

私は今、死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な精神を持っているだろうか。維新の志士の如き烈しい精神で取り組んだものがある

だろうか。これは、私がこの一文を読んだ時に漠然と湧き出た自問である。

漱石が明治三十九年十月二十六日に、自身の弟子である鈴木三重吉に宛てた書簡には、文学の師匠としての助言が書かれている。その中で、私が選んだこの一文からは、漱石の文学に懸ける熱い思いが感じとれる。当時、イギリス留学から帰国し、作家として世に知られ始めていた漱石は、当時の文学界に物足りなさを感じていたのかもしれない。大正三年に漱石が講じた「私の個人主義」でも触れていたが、当時の文学界は西洋の文化をいかにも自分たちの意見のように主張し、時代が時代のためそんな風潮が流行のようになっていた。そんな中で、自分の意見や文学を恐れずに発表することが必要と考えていたのだろう。

現在の私には、命をかけて取りくんでいるものが見あたらない。ましてや、今までの人生でそこまでの気力、労力をかけたものが無いだろう。一般的な家庭に生まれ、一般的な教育に流され育ってきた。よって、今の私は抜け殻のように毎日を送っている。そろそろ大人になっても良い頃だと思ふ。しかし、現在の日本には、大人であっても漱石のようなひたむきな精神を持って生きている人は、そう多くないように感じる。「生きるか死ぬか」、「命をかけて」仕事をしている人などいるのだろうか。ましてや、現在の社会ではそのような「ひたむきさ」は馬鹿にされているようにさえ感じることがある。どこか冷めた姿勢で、「命をかける」なんてことは、程遠

い人々ばかりであろう。そして、「私の個人主義」でいう、他人や外部からの意見や見解を鵜呑みにして、あたかも自分のもののように考える人が大半になってしまっている。これでは、自己主張もできず、生ぬるい大人ばかりになってしまう。そうすれば、漱石もさぞご立腹されることだろう。

私は、改めてこの一文を自分なりに解釈した上で、一つの目標を得ることができた。それは、自分が「命をかけて」取り組める事を探す、ということである。言い換えるなら、漱石にとっての「文学」を自分なりに模索するのである。もちろん、これは容易なことではない。「幕末の志士」の世を変えてしまう程の精神ははかりしれないものだろう。それだけ、漱石も「文学」に懸けていた、ということだろう。私も、「ひたむきさ」が失われていく現在の社会で、危機感を抱いた漱石のように、自分のやるべき事、やりたい事にうちこんでいくことを決意した。漱石の書簡からのこの一文は、私の人生にとって糧となる一文であった。

《高校生の部》

佳作

吾輩は猫であるを読んで

群馬県立伊勢崎興陽高等学校 3年

上野 竜朋

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

私は猫を飼っています。そんなことからこの「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」を選んだのですが、うちの猫との出会いは思い返すこと約2年前の春のことでした。ちょうど梅雨も始まり毎日の登下校がびしょぬれで大変な時期でした。そんなある日の帰り道に私は衝撃的な光景を目の当たりにしました。その日は前日から朝にかけて大雨が続いていました。帰り道も小雨がポツポツと降っていてとても嫌な空気でした。そんな帰り道に道の端に小学生と中学生が何人か集まって何やら心配そうな顔で何かを見つめていました。私は最初めずらしい生き物でも出てきたのかと思い、その集団の横を自転車で通り過ぎようと思いました。その時その中央に茶トラ柄の

小猫がその場にうずくまっている姿が、目に飛び込んできました。

1度は通り過ぎたもののあの時に見た学生達の心配そうな表情をふと思い出しました。その途端、意志よりも先に自転車ペダルをこいでいました。戻った時にはその場の人数も減っていて、すぐに子猫の姿を確認することができました。前日から大雨によって親とはぐれたのでしょうか、その近くに親猫の姿はなかったはずくまるように小猫がいました。全身びしょぬれで、目もあいていなくても震えていました。私は、この子を助けなくてはと思いすぐに自転車のカゴに乗せて家に向かいました。

家に着いてすぐに母に事情を説明しました。母は真剣に私の話を聞いてくれました。それから車で近くの動物病院につれていきました。子猫の状態は最悪で今夜が山場だと獣医さんに言われました。それと同時に

「君はとても素晴らしい事をした。よくそこで見捨てないでこの子を助けてくれた。もしこの子が明日を向かえられなくても自分を責めないでほしい。もし元気になれば名前を付けて家族の一員として向かえられてあげてほしい。」

そう言われた事はいまでもはっきり心に残っています。その後、無事に朝を向かえることができました。この子を家族として受けいれるために必要な名前も私が「くう」という名前を与えました。あつというまにすくすく育ち今では毎日、あの日の弱々しさがうそのように家の中を走り回ったり皆に飛びついてきたりとヤンチャな姿を

目にすることができます。

このように私は猫を拾い、危機を乗り越え家族になるということを経験しました。そんなこともあり、吾輩は猫である、名前はまだ無いという一文が自分の経験ととてもシンクロしていて、とても心に残りました。

《高校生の部》

佳作

『記憶』

鎌倉女子大学高等部 2年

中山 佳那子

作品名 『こころ』

選んだ一行

『記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。』

私が選んだ一行は、『こころ』より、「記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。」という一行です。これは、「先生の書いた遺書の最後の部分に書いてある一行で、「こんな風は」を

それまでの部分で説明されています。私がこの一行を選んだ理由は、「忘れないで下さい。」でもなく、「覚えていて下さい。」でもなく、「記憶して下さい。」と「私」に頼んだその背景が、あまりにも深く、暗く、この小説全体のイメージをこの一文で表現していると感じたからです。

私はこの小説を「深く、暗く」と表現しましたが、その根底にあるものは「死」だと私は捉えました。この小説の中では「死」が多く出て来ます。それが、病死であっても自殺であっても、その死んでいった人、死にそうなる人の大切な人への、感謝、謝罪、後悔の念が、この小説の中に、「私」と「先生」、「私」と「父」、「先生とK」との話の中で、「暗く、深く」書かれ、それが私が思い描く「死」の色になっていると感じました。

そしてもう一つ。私が選んだ一行の中で、「こんな風にして」と「先生」が自身の人生を表現した部分がありました。「先生」の過去の中で、「K」との恋愛面の三角関係がありました。「K」は堂々と「先生」に自分の気持ちを伝えましたが、「先生」は、奥さんに裏でこっそりと気持ちを伝え、最終的に結婚しました。私は恋愛の経験は無く、ましてや三角関係の経験など一切ありませんが、ただ一つ分かることは、「先生」は「K」に恋愛面の賭けに勝利し、一人の人間として敗北したということです。結婚が認められた夜に「K」は自分の部屋で自殺してしまいます。この過去が「先生」のその後の人生に大きく影響を与え、苦しませ続ける出来事となりました。

自分だけ裏で済ませてしまおうという「先生」のエゴイズムが招いた出来事と、私は思いました。

この小説を全体的に見て、たくさんの方の人のたくさんの感情がむき出しになって表れているなと思いました。それは、感謝であり、謝罪であり、後悔であり、それは全て昔も今も変わらない、生身の人間の「こころ」だなと思いました。「先生」が「私」に充てた長い長い遺書は、ただ自分の過去を誰かに知って欲しかっただけでなく、「自分はこんな人生を歩み、人を殺し、ずっと死にたいと思って生きてきた。」という事実を、自分を信じてくれる「私」に記憶して貰いたかったものと思いました。

エゴイズム

北鎌倉女子学園高等学校 2年

井上 真奈恵

作品名『こころ』

選んだ一行

もし相手がお嬢さんでなかったならば、私は彼に都合のいい返事を、その渴き切った顔の上に慈雨の如く注いでやっただか分かりません。

この一行が私の中に強い印象を与えたのは少なからずこの感情に覚えがあるからに違いない。

この言葉を胸の中でつぶやいた先生は、同じ相手を好きになった友を妥協させようと画策している。自分の恋を成就させるため、相手の心を折る。それも、幼馴染であることからKの生真面目な性格を逆手にとって追いつめるといふ、普通に考えれば、卑怯な戦法である。自分の想いを成し遂げる為このようなことをしているのだから、当然これは先生のエゴである。実際、物語ではKは自殺すると

いう最悪の結果を迎え、またそれによってKを追いつめた張本人である先生自身の人生をも狂わせてしまった。つまり、このやり方は自己中心的で、少なくともKに対する先生の態度はエゴイストなのだろうと読み取れる。だが、私はどうも先生を憎めない。むしろ共感する部分さえある。というのは、もし私が先生と同じ立場になったのなら、Kに全く同じ感情を抱くと思うからだ。自分の方が先にお嬢さんを好きで、後から来たKにその想い人を取られてたまるかと躍起になる気持ちはエゴでもなんでもない。そもそも、相手がお嬢さんでなくとも、先生はKに心からの応援をする気はないし言葉にあるように、投げかける慰めはKにとって都合のいい返事ではないのだ。本人は真剣に悩んでいたとしても、結局相談相手である私に求められる答えは相手の渴きを満たすような答えであり、むしろそれしか与えてやることはできないのである。

この二人の状況と、先生が行っているエゴイズムは何も不思議ではない人間の本性なのではないかと私は感じた。先生の行為は計画的に過激になり、自らの信念と恋愛感情のはざままで思い悩むKを苦しめていく。先生は自分のしていることが本当はすべきことではない、素直に自分もお嬢さんを好きだと白状しフェアに争奪をするべきだと内心わかっていながら、Kを確実に落とす方法を模索している。これも人間らしい行動だと私は思った。

狡猾なやり方をするしかないのは、対等にやりあったとき、自分が勝利できる確信がないからである。何としてもお嬢さんをKに渡

したくない、そう強く思うがゆえに、確実な手段をとりたくなってしまう。人間は相手より先手を読めると安心するのだ。そして安心するために劣等感の中からひり出すように優越感を生み出す。さらに言うなら、失うものが何もないとわかっていると大げさなことをしてみたくなるものである。私が、この一行に肯定的であるのは、私自身が知りうる感情であるからとともに、この感情が何よりも、人間らしいからだ。動物のように決闘するのではなく、相手の精神部分に働きかけることで相手を弱らせることは人間しかできない。この一行にはその人間らしい露骨な表現が詰まっている。先生の一途な気持ちは当の本人にとってはエゴイズムという領域から脱しかけているのだ。

《高校生の部》

佳作

こころの色

北鎌倉女子学園高等学校 2年

木島 天音

作品名 『こころ』

選んだ一行

汚れたのを用いる位なら、一層始から色の着いたものを使うが好い。白ければ純白でなくっちゃ

先生が人を色に表して見る表現は『私』と先生の会話・先生の遺書の中で時々出てくる。

『こころ』という作品は人間の心理描写に特化した作品である。作中で最も細やかに表現されている『私』が先生と呼ぶ人物の人間に対しての重要な判断基準が出てくるのがその先生の台詞だ。この台詞の後に、先生が自分は精神的にも癩性であると言っているが、『私』や先生の奥さんは理解を示していない。つまり、ここが先生のこころを解釈するうえで重要な部分であるという事が推測できる。後々出てくるが、これは先生が物だけではなく、人にも潔癖とい

うことだ。先生の遺書を読んでみて、特にその癖が顕著に表れているのは若い頃の奥さんに対しての先生の態度だ。先生は奥さんのことを汚してはいけない純白の様に取扱いおうとしているのが判る。そのために先生は奥さんにKとの事を話すことができなかったのだ。先生は奥さんの純白を自己の汚い感情で汚したくなかったのだ。そのため奥さんはその汚れを一切知らないが、しかし先生に一滴の黒、不明な部分のみを感じ取っている。私は純白ではないから、先生のすべてを知ることが出来たのだ。

反して、先生の遺書の中で一番の重要人物であろうKに対しては一切その様な描写がない。ここが一番面白いところであると私は思った。Kを先生なりに把握できていないのだ。先生はKのこのころの色が判らない。それは、Kの女嫌いを直そうとしその結果奥さんと仲良くなると嫉妬し、しかし二人で旅行に行ったりもするがKが私に対して奥さんへの想いを暴露しても、先生は自分も奥さんが好きだといえない、そしてKの恋愛などをしないという最初の志を突き付けて攻撃する等の、先生の二・三転するKへの行動で良くわかる。私は、先生本人は自覚していなかったが先生から見ると、実はKも純白であったのではないかと推測する。だから奥さんと同じように、Kにも思いの内を打ち明けられなかったのではないか。その思いを秘めたまままでいたから本作の結末になったのでは、と。

こうすると先生の心情が少しは理解できた気がする。しかし先生が色に例えた様にはこころは一言で表せるようなものではない。そ

こが本作の興味深い部分で、感想文を書いている今も読み返せば読み返した分だけ色の数が変わる、謎が増えたり解決したりする。『こころ』が暗くてつまらないと思う読者の気持ちもわかる。本来の人気作品という括りなら、きっと先生はKか奥さんに気持ちの一切を打ち明けるところがきっと、作品としての山場であり読者の感情が最高に昂るところになるであろうから。しかし本作にそれはない。そこを興味深く思うか、つまらなく思うかが、この作品『こころ』を読むうえの分岐点である。

《高校生の部》

佳作

心に残った一行

広島県立海田高等学校 1年

栗栖 香枝

作品名 『夢十夜』— 第一夜—

選んだ一行

「百年はもう来ていたんだな」とこの時はじめて気が付いた。

私が選んだ一行は「『百年はもう来ていたんだな』とこの時はじめて気が付いた。」というところです。この一行は亡くなった女性を百年間も待ち続け、女性の墓から咲いた百合を見て主人公である男性が言ったものです。

私がこの一行を選んだ理由は、読む人、読む回数によって異なる意味にとらえることのできる一行だからです。二つ目の意味は亡くなった女性と再会できた喜びです。私は最初、百合にはどんな意味があるのか分かりませんでした。しかし、何度も読んでいるうちに女性と百合に共通点があることに気が付きました。それは、女性の真っ白な頬と百合の真っ白な色、女性の涙が頬へ垂れたことと百合に露が落ちたこと、女性の静かな調子と百合がふらふら動いたことです。また、百合は女性のお墓から咲いてきました。これらのことから百合は女性の生まれ変わりであることが分かりました。私の選んだ最後の一行には、再び女性と会うことのできた喜びと感動、女性を思い続けてきた百年があつという間だったという男性の気持ちが含まれていると思えました。

二つ目の意味は男性の亡くなった女性ともう会うことができないという悲しみです。私は一つ目の意味の中で疑問が一つ残りました。それは、百合は本当に女性の生まれ変わりであったのかということ。そう思った理由は二つあります。それは、「来ていた」と過去形になっていることと、百年が過ぎていたことを百合が咲いてはじめて気が付いたことです。百合が女性であるならば、百合は百年

目に咲くはず。しかし、この二つの言葉からすると百合が咲いた時にはもう百年は過ぎていたことになります。このことから百合は女性の生まれ変わりではなかったと考えることもできます。

私は女性は星となったのだと思います。百合は、女性が男性に百年たったから待たなくても良いと伝えるために咲いたのだと思います。また、遙か上からぼたりと落ちてきた露は星となった女性の涙で、百年も自分を思い、待ってくれていた嬉しさともう二度と逢えない悲しい気持ちが込められていると思えました。選んだ最後の一行には、男性だけでなく女性の悲しい気持ち、まだ好きだという気持ちが込められていると思えます。

この本は直接言葉で表していないのに読む人にそれを伝えているのがすごいと思えました。また、直接言葉で表していないからこそ、読む人、回数によって異なる意味にとることができるのだと思えます。

前向き

広島県立海田高等学校 1年

藤原 ゆりあ

作品名『坑夫』

選んだ一行

つまり自分が苦しんでるんだから、自分で苦みを留めるよりほかに道は
よりほかに道はない訳だ

私は夏目漱石の作品の一つである「坑夫」という本の中の「つまり自分が苦しんでるんだから、自分で苦みを留めるよりほかに道はない訳だ。」という一行が、一番心に印象強く残りました。

一文を読んだ時、明るい前向きな一行が印象に印ったという人の方が多くのではないかと思います。しかし、私は「苦み」という明るい感じとは真反対な言葉が入っている一行を選びました。理由は二つあり、一つ目はなぜなら、その一行に深く共感することができたからです。そして二つ目は、最初、特に何も考えず読んだら暗い雰囲気しか感じないように思うけれど、よく読んでみると前向きな

ことを言っているんだと思ったからです。

私がこの一行に共感することができたのは、以前に私も似たようなことを思ったことがあったからです。私は高校に入学した時、クラスに同中の女の子が一人もいなくて、友達がいないう状態でした。他の子達は、同中の子がほとんどいて、和にとっても入りにくく、和に入った後もなかなか自分の本当の性格を出せず、馴染めなくて毎日泣き、本当に辛かったことを今でも覚えています。でも私は、自分でこの状態を変えなければ、これからずっとこのままなんだろうと考え、絶対にこの状態を止めようと思いました。中学の友達に気持ちを共感してもらうのは精神的に楽になり良いことです。しかし、高校では何も変わらないと気付き私は、中学の友達にしていた同じ接し方をして、いつも通りの自分でいざしたらすぐに馴染むことができ、嫌だった状態を終わらせることができて、今となってはあの時頑張って良かったなと本当に思います。この経験から、辛いことは自分でなんとかしないと、終わるのは遅くなると知ることができ、これからもそういう場面になった時は自分で何とかしていこうと思います。

「自分で苦みを留めるよりほかに道はない」という言葉は、自分の力でなんとかしなくてはならないという意味だと考え、私は前向きに頑張る感じが伝わってきて良いなと思いました。

ほかに道はない、ということとは、逃げられないということです。逃げて向き合うことで自分を成長させることができます。メンタル

をきたえることもできません。

そういう意味があると考えると、考えたらすごく良い一行だなと思い、印象にもとても残りました。

これからも、辛いことがあると思います。そんな時はこの一行や、高校入学してからの自分を思い出し頑張ろうと思います。

《高校生の部》

佳作

臆病者の届かない叫び

広島県立海田高等学校 2年

笹木 萌々子

作品名『三四郎』
選んだ一行

「ただ、あなたに会いたいから行ったのです」

友達が少ない、人付き合いが苦手で親を困らせてばかりでした。気が利かない悲しい人。それが私です。そんな私が嫌いな私と向き合うきっかけをこの一行はくれました。

「ただ、あなたに会いたいから行ったのです」という一言を読ん

だ時、最初はただ「こう言われたら嬉しいな」とかその告白のようなフレーズに少しドキドキしていました。けれども、それと同時に、そのような感情を抱いていた自分に対して恥ずかしいと思いました。誰かに知られるわけでもないのに、どこかへ隠そうとしていた自分もいました。私はその感情に対して恥ずかしさと嫌悪感を抱いていました。そして、「自分らしくない」とか「何、考えているんだ」と自分をどこか責めていました。「私ごときが、こんなことを思って、ごめんなさい」といつものように、謝まりなくなりました。部活などで人間関係を築く上でも、周りの人から嫌われたくないため、いつも謝まっていることで、自分の本当の弱さから目をそむけていました。そもそも、そこまで過剰に他人の目を気にしている必要はなかったと今は思います。自意識過剰だという自分の弱さに気付くことができました。

そして、中学生の時のことを思い出しました。こんな私も恋をしていました。初めは自覚がありませんでした。けれども、もうその時から、その人のことを目が追っていました。話しかけてもらえるように、明るい雰囲気心がけていました。その人がいること自体が奇跡だったと今は思います。同じ学校の同じ教室にいるという毎日今は少し恋しいです。当然、物語のように明るい感情ばかりではなく、嫉妬やその人の一言に一喜一憂したりと、つらいこともありました。そのこともあり、「それでも、楽しかった」と思うことができませんでした。きっと、主人公のように自分の言葉で気持ち

を伝えていけば、三年経った今でも後悔していることはなかったと思います。ずっと、漠然としていた根本的な理由が分かりました。自分の言葉で伝えることができた主人公が少し羨ましいです。きつと不安で仕方がなかったと思います。私はその人からどう思われるのかが怖かったです。そして、私はその怖さから逃げました。

小説の一行に対して、こんなに親近感が湧いたり、心を動かされたりするのは初めてでした。これからは、こんな私と向き合ってください。またい。：違う。「こんな私」と今まで何度も言ってきました。いつも周りの人に気を遣って、気を遣わせてきました。もう、周りの人の顔をうかがっていくのは、疲れてしまいました。けれども、どうしたら正解か分かりません。模範解答さえあればいいのに、それもあります。それでも、答えが見つかるまでは、どんなに苦痛でも一日一日を生きていく以外、選択肢はありません。自分なりの答えを探していこうと思います。

《高校生の部》

佳作

正解はあったのか

立命館高等学校 2年

名古屋 あかり

作品名 『夢十夜・第七夜』

選んだ一行

ところが——自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなった。心の底からよせばよかったと思っ

私の心に深く残った一行は夢十夜の第七夜の中の「ところが——自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなった。心の底からよせばよかったと思っ」という部分です。

夢十夜の中でも特に第七夜は夏目漱石の心境や本心が見え隠れしていると感じ好きな話なので、そこから一文を選ぶことにしました。私は本文中のような経験したことがあります。読んでみると後悔している様子がすごく伝わってきて、私まで不安な気持ちになった

ので、わかりやすかったと思いました。

主人公は自分の人生を無意味だと感じ自殺することを決意しますが、人生を投げ出したら楽になれるのか、解決されるのかということそれは違うと思います。主人公が自殺を決めたのは、何で生きているのかわからなくなり自分の人生がつまらなくなったからだと思いますが、生きる目的がわからなくても生きる意味がないという理由にはならないと思いました。そもそも生きる目的を考えて一時的なものではなく『生きていてよかった』と考える人はなかなかいないと思うし、みんな生きる目的なんて知らないと思ったからです。そういう点では、この作品を読んで生きているとは何かについて考えることができました。

周りに人がいるのに問いかけても思ったような問いが返ってこず、自分をわかってくれる人ではないし、自分の疑問に共感してくれる人でもない。心細くて不安な心境とその情景が想像できて、そこに黒い海が見えたら飛び込んでしまいたいと思うのかもしれない。

主人公は、この世に生まれた以上何かしないといけない、でも自分は何をしているのかわからないし、何をすることがよいことなのかわからないと思い自分を追い込んでしまったのだと思います。船に乗っていても生きる意味は見つからなかった。結局飛び込んでも待っていたのは飛び込まなければよかったという後悔と、黒い波が立つ海へ沈む恐怖。暗い結末が待っていたというのでも「心の底からよせばよかったと思った。」というところに含まれている気がしま

した。

しかし、生きる意味がないと思い自殺を決意して飛び降りたのに、その瞬間に「急に命が惜しくなった。心の底からよせばよかったと思った。」とそれをとても後悔したという表記があったところが、あれほど思いつめていて決意したことなのに結局後悔するのか。と思いにあって予想しなかった衝撃的な展開だったので『わたしの一行』に決めました。

《高校生の部》

佳作

「百年」に込められた女性の思い

立命館高等学校 2年

森本 夏未

作品名『夢十夜・第一夜』

選んだ一行

「百年はもう来ていたんだな」

「百年待っていて下さい」という部分が、私の心に残った一文です。なぜならこの一文は男性に、「この世に存在しなくなる自分を、

あなたは死ぬまで私を愛せますか？」という間接的な問いかけだと思っ
からです。

夢の話だとは言え、百年間も生きていられる訳がありません。もうすぐ死んでしまう女性が、自分の好きな男性に一生愛してもらえるか試しているのだと思います。一度しかない人生だから、男性が「次の人と恋しよう」と思い、新しい女の人と愛し合うことを、女性
は恐れたのだと考えました。

男性は、女性を百年待ち続けることを約束し、お墓のそばですと待っている場面が感動的でした。日をいくつもいくつも眺め、まだかまだかと待ち続けている男性は、本当に女性のことを愛していたのだと思いました。しかし、男性が「自分は女に欺されたのではな
かろうか」と思ってしまった瞬間がありました。その瞬間真っ白な百合が咲き、男性は「その花が待ち続けた女性の分身で、百年はもうきていたのだな」と思いました。私はこのことから、女性は「あなたの私を愛する気持ちが途切れたとき、一度会いに来ます」とい
う思いを、「百年待っていて下さい」という一文に込めたのだ
と思いました。この物語で百合が咲くとき、遥の上からぼたりと露
が落ちてくるという描写があります。私はこの露は、女性の涙だと
考えました。女性は自分が死ぬときに男性と交わした、百年（死ぬ
まで）自分を愛し続け、待ち続けるという約束を男性が守れなかつた
ので、悲しくて泣いたのだと思います。

この物語でいう「恋」とは、愛し合っている男女が一緒に楽しく

過ごすことではなく、離れた場所から、相手のことをずっと想っている
状態のことだと私は考えました。男性が女性のことを疑ってしま
い気持ちが一瞬でも切れたので、男女の恋は終わり、女性が悲し
みながら男性に会いに来たのだと思います。男性が女性のことを疑
わずに待ち続けることが出来たなら、二人はずっと恋をした状態
いることが出来たのではないかと思います。確かに、長い間実在
しない相手を想い続けることは難しいですが、女の人と約束したの
だからしっかり待っていて欲しかったです。出来ないのなら、軽く
約束しない方がいいと思いました。

そして、夏目漱石のこの物語には、「百年」というキーワードが
たくさん出てきます。女性が待っていて下さいとお願いしたのも百
年であったし、百年後に会いに来た女性は百合の花で、百という文
字が含まれています。百合には、「百年後に合う」という意味が込
められていると感じたので、とても粋な計らいだと思いました。

「百」という文字が含まれていて、男女間の愛を試すような「百
年待っていて下さい」という一文が私の心に残りました。